



特定非営利活動法人 アクション

すべての子どもには幸せになる権利がある 世界中の子どもたちの「生きていく力」を育みたい



フィリピンのデイケアセンターの子どもたちに折り紙を教える日本からのボランティア

「将来の夢ややりたいことがなかった高校1年の時、障害者施設でのボランティアをきっかけに自分の世界が広がるのを感じました」という「アクション」代表の横田宗はじめさん。高校3年生の時、フィリピン・ピナツボ火山の噴火で被災した孤児院の復興作業に参加。そこでお世話になった現地の人たちに何か恩返しができないかとの思いから、亜細亜大学在学中にアクションを立ち上げたそうです。

フィリピンでの活動のメインは、児童養護施設の子どもたちやストリートチルドレンなど、貧しい子どもたちが社会で自立するための職業訓練です。プロによる美容師やセラピストの養成講座など、厳しい境遇の子どもでも手に職をつけることで「生きていく力」を身に付けられる取り組みを続けています。

もう1つは、児童福祉施設の職員研修です。子どもたちの支援だけではなく、彼らを取り巻く社会環境自体を改善していく必要があるとの考えから、フィリピンの社会福祉開発省に提案を行い、JICAの「草の根技術協力事業」の事業として児童福祉施設の職員向けの研修制度を確立。現地の児童福祉施設職員の能力向上にも大きく貢献しています。

武蔵野市とは、市教育委員会が国際理解教育事業として毎年開催する土曜学校「世界を知る会」で、アクションの事務局が講師を務めています。市内の小学生を対象にした国際理解のためのプログラムですが、昨年度はコロナ禍のためすべてをオンラインで開催。それでも、モンゴルやフィリピンの子どもたちと市内の小学生がオンラインで意見交換をするなど、にぎやかに交流したそうです。

「参加したある子どもが『将来はエンジニアになりたい』という夢を口にしたら、フィリピンの子どもの1人も『僕もエンジニアになりたい』と答えていました。遠く離れた場所と同じ夢をもつ子がいることが分かってとてもうれしそうでした」と日本事務局スタッフの小池涼子さんが教えてくれました。

新型コロナウイルスが拡大する前には、フィリピンの社会福祉開発省の事務次官と局長を武蔵野市に招き、副市長らと子どもたちの貧困問題についての意見交換も行ったといいます。「フィリピンでは子どもの貧困対策も進んでいます。日本が学ばべきことも多々あります」と横田さん。世界を横断する子どもたちに生きる力を与える活動は、これからも続きます。

特定非営利活動法人アクション

1994年設立。代表、横田宗（はじめ）。亜細亜大学卒。フィリピンを中心に児童福祉施設やストリートチルドレンの支援活動を行い、日本の学生や企業研修のための海外ボランティア体験事業なども実施。フィリピン事務所に日本人職員1名、フィリピン人職員20名。武蔵野市の日本事務局には日本人職員2名が在籍、算数教室の運営もしている。2010年国際交流基金地球市民賞、2019年中部ルソン・ベスト地域型NGO賞受賞。



横田宗代表(左)と日本事務局スタッフの小池涼子さん(右)



フィリピンの有名美容師によるヘアカット指導